

安楽寺だより

第43号

第2回 お釈迦さまの少年時代

釈迦族の王子としてご誕生されたシッダールタ王子は、お生まれになつて七日後に母・マヤーと死別されました。その後、母の妹・マハーパジャパティに養育されました。

シッダールタ王子は、王族として恵まれた幼年・少年時代を送られました。王子のために用意された雨季・乾期・冬期のそれぞれの気候に適した宮殿で過ごし、物質的には何不自由なく育てられ、やさしい内省的な少年に成長していかれました。

ある日、王子は鋤入れの農耕祭の時に、ある場面を目撃しました。「耕した土の中から出てきた虫を飛んできた小鳥が啄ばんで、くわえて飛び去つて行くこうとしました。巢で待つ雛に与えるためだったのでしよう。そこへ一羽の猛禽が現われ、その小鳥を捕えて大空高く飛んでいき「王子は生きとし生けるものが、順々に食べ合っているのを見て、いたたまれなくなつて、森に入り木蔭で思索を続けられました。」

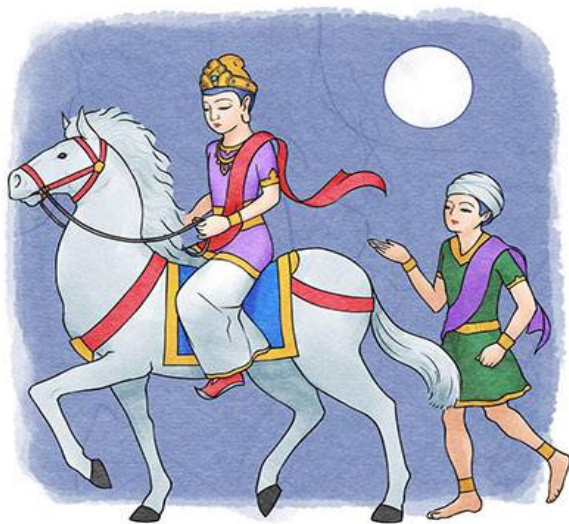
紙面内容

2面	二年ぶり春季永代経法要厳修
3面	東別院で定例法話勤める 若院
4面	日本仏教史(補足) 覚如上人

また、シッダールタ王子は、神経が繊細で、感受性の強い少年だったようです。

後年、お悟りなられたお釈迦さまが、お弟子たちに自分の若き日を回顧して次のようにお述べになりました。

繊細で感受性の強い王子



『・・・このように、わたしは豊かで、この上なく繊細だったが、(ある時)このように考えた。人間というのはまことに無知なもので、自分の身が老いゆき、老いから逃れようもないものなのに、他人が老衰したのを見ると、自分のことは棚に上げて、面倒に思い、恥じ、嫌らしいなと思う。しかし、私もまた、老いゆき、老いから逃れようもないのだ。それなのに、ほかならぬ私の私が他人の老衰を見て面倒に思い、恥じ、嫌だなと思つている。これは私に相応しいことではない。このようにみてとつた時、青年期の若さの意気は消え失せてしまったのです。』(増支部経典より)

お釈迦さまのこうした反省が、老・病・死とは裏腹の若さ・健康・生命の驕りへの反省にほかなりません。漠然たる嫌悪が自己の驕りである気がついた時、他人事ではなく、お釈迦さま自身の問題になっていたに違いありません。

「人はなぜ死ぬのか」「なぜ思いどおりにならないのか」を真剣に考えながら少年青年期をお過ごしになりました。

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話 〇五二(八四一)二六〇六

春季永代経



二年ぶりに厳修

五月十三日、春季永代経法要をお勤め致しました。昨年三月以降、新型コロナウイルス感染拡大により、昨年の法要はやむなく中止し、二年ぶりの開催でした。三密を避けるなどの感染防止対策をした本堂で

読経する中、亡き故人を偲んでご焼香をしていただきました。

その後、椰野明仁師（西尾・本澄寺住職）

のご法話をお聞きしました。

聖徳太子「わたしは凡夫である」

「今年には聖徳太子が亡くなられて一四〇〇年になります。紀元五三八年、朝鮮百済の聖明王から仏教経典や仏像などを献上され、日本の仏教が始まりました。

その後為政者の間で、仏教を巡る争いが起こっていました。このような状況の中、誕生された聖徳太子は、仏教に深い理解と信仰を持ち、仏教を基本とした政治を行ないました。

聖徳太子は、難波の四天王寺や奈良の法隆寺を建立する一方、十七条の憲法を制定されました。有名な『和を以って貴しとなす』（第一条）『篤く三宝（仏・法・僧）を敬え』（第二条）のほか、『忿りを絶ち、瞋を棄て、人の違うを怒らざれ』（第十条）の中に、『われ、必ずしも聖にあらず、彼、必ずしも愚にあらず、共に凡夫のみ・・・』

と日本で最初に「わたしは凡夫である」と申されました。

親鸞聖人は、『和国の教主聖徳王、広大恩徳謝しがたし・・・』と、聖徳太子のご功績を述べられた和讃を多く残されています。

親鸞聖人は、比叡山で二十年に及ぶご修行された後、二十九歳の時、京都・六角堂で聖徳太子の夢告を受け、お念仏の道へ歩みを始められました。

私たちが永代経をお勤めするのは、亡き人のご命日を通して『これまでむなく生きていたのではないかと気付いてほしい』『亡き人を縁としてのちの尊さに出遇ってほしい』と阿弥陀さまから願われている身であると、いただいでいく法要です」

椰野師は、今年五月に自坊で厳修された本堂落成法要や自身の体験を織り交ぜてお話しされました。



聖徳太子(574～622)

東別院で定例法話

若院 吉田昌史

四月十五日に名古屋別院の定例法話にてお話をさせていただきました。

このようなご時世の中では御座いしましたが、たくさんの方にお参りいただいて誠に有難うございました。なかなか解りにくい話だったと思いますが、皆様の心に一つでも残ればと思っております。

今回、お話をさせていただいたのは、「南無阿弥陀仏をいただく生活」を送らせていただいている私たちが、何を大切にしていかなければならないのか、それは、裕福でも、貧乏でも、賢くても、そうでなくても必ずや『南無阿弥陀仏』の一声で阿



聖人のお言葉を聞く

弥陀さまが救ってくださる教えを頭(あきら)かにされた親鸞聖人のお言葉を聞くこと。聞法(もんぼう)していくことが真宗門徒にとって大事なことであり、学ばせていただきました。

普段私たちがお内仏の前で手を合わせている時に、自然と『南無阿弥陀仏』が出てくることの尊さ、それはお釈迦さまの時代から脈々と伝わってきた浄土の教えを伝えてくださった先人たちがいるということ。そして、親鸞聖人から伝わる浄土真宗の教えを絶やさず、廃れず伝えてくださった真宗門徒の方たちがいらっしやうたからこそ私たち



東別院対面所で聞く皆様

がお念仏をいただけていることが、とても尊い教えではないかと私は思います。何もお念仏を申したら、力がみるみる湧いてくるわけでも、何か自分の生活が劇的に変わるわけでもありません。煩惱具足の凡夫こそが救われる教えを、身を持って頭かにされた親鸞聖人。どこまで落ちても救ってくださるお念仏があるから安心せよと言っておられるような気がしてなりません。

そして真宗中興の祖と呼ばれる蓮如上人の御文のなかの「安心(あんじん)の一義」を通して、真宗門徒として『南無阿弥陀仏』というお言葉を、どのように受け止めていったのかを、お話させていただきました。

少し時間の関係でお話しできなかったところもありましたので、もしまた皆様の前でお話させていただく機会がありましたら、お伝えできたらと思っております。

凡夫こそ救われる教え

仏教豆知識

第四十三回



日本仏教史

補足の覚如上人

鎌倉時代に開創された仏教各宗派は、一方で朝廷や武家などと結びついて栄える宗派、また地方の民衆の中に教えを広めていった宗派もありました。

浄土真宗は、有力な門弟を中心とした念仏集団が、関東各地で形成されました。その後、次第に組織化されて、京都や近畿周辺で発展しました。

親鸞聖人の末娘・覚信尼(一二二四～一二八三)は、聖人のご往生の後、京都東山に大谷廟堂を建立されました。

その後、聖人の曾孫(覚信尼の孫)覚如上人(一二七〇～一三五二)は、十七歳で奈良興福寺の一乗院で授戒されました。十八歳で如信(聖人の孫)から「他力の法門」を口伝されて、血脈相承され

ました。

上人は一二九四年(永仁二年)、親鸞聖人三十三回忌に「報恩講私記」を著わされ、翌年に、聖人の遺徳を讃える「親鸞聖人伝絵」御伝鈔を著わされて、大谷廟堂が正統なことをあきらかにされました。

覚如上人は、一三一〇年(弘慶三年)四十一歳の時、廟堂留守職を継承されました。

その後、廟堂を親鸞聖人の教えを説く道場とするために、寺院化を目指して尽力されました。比叡山などの反対がありました。が、龜山天皇より下賜され、「本願寺留守職」に就任されました。(本願寺のはじまり)

上人は、ご生涯をかけて、念仏相続のためご教化をつくされました。



本願寺第3代覚如上人

今年の東海地方は、五月中旬に記録的な早さで梅雨入りしましたが、梅雨明けに関しては平年並みの地方が多いと予想されています。(昨年は八月一日が梅雨明けでした)梅雨末期の大雨と極暑の時期が待ち構えています。体力が低下している高齢者にとって、大変厳しい季節です。▼昨年来の新型コロナウイルス感染拡大の不安の中で、やっと先月頃からワクチン接種が始まりましたが、集団接種・職域接種の予約を一時中断する事態に戸惑っている方も、少なからずあります。▼東京オリンピック開催も迫っています。政府は「国民の安心・安全が第一・・・」と説明していますが、コロナ対策が今一つ信頼出来ません。▼私たちは、各人の健康維持のため、マスクの着用、消毒の徹底、三密による感染を防止する生活が、まだまだ続くことを覚悟して、夏場を乗り切りたいと思っています。